

化石館だより



コラム

金生山の海綿化石

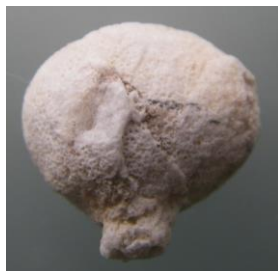
今回のテーマは「海綿」です。海綿（カイメン）は英語で Sponge と書きます。スポンジとは・・・、そうです、クッションや食器洗いなどに用いる小さな穴が沢山ある合成樹脂でできたあの製品のことで。現在私たちが用いているスポンジの大半は樹脂製ですが、古くは海岸に打ち上げられた海綿動物の骨格を拾い集めて用いていました。現在でも高級品として生物由来のスポンジが用いられていますが、中でも地中海産のものは特に質が良いとされています。

海綿は水生の動物です。淡水に棲息している種もいますが、海水に棲息するものが大部分です。その生息範囲はとても広く、極域から熱帯域、浅海にも深海にも広がっています。海綿化石は古生代に先立つ先カンブリア紀からも発見されており、生物としては非常に長い歴史をもっています。多細胞生物ですが、体のつくりは単純で最も原始的な多細胞生物であるとされています。海綿動物の体は、壺状または袋状のゼラチン質からなる壁によって形作られていますが、その壁は石灰質やガラス質（珪質）、角質の骨針によって構成される骨格によって支えられています。海綿類の分類は骨針や骨格の形などに基づき大きく「石灰海綿類」、「ガラス（珪質）海綿類」、「普通海綿類」に分けられています。



海綿化石は、ウミユリや貝類の化石に比べると魅力に欠けるようで、採集をする人も研究をする人も限られています。金生山では下部層から最上部層まで全ての部層で海綿化石が採集されていますが、詳しい研究はなされていないようです。

写真は、風化面に現れた海綿化石（左上）、
Girtyocoelia sp.（下左・下中）
Amblysiponella ? sp.（下右）

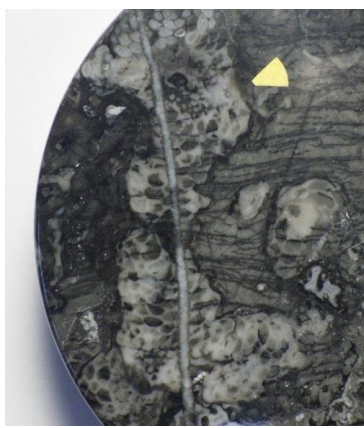


金生山の海綿類化石については、「浅見化石会館化石図集」(1995)で牧口貴久が解説しています。それによると、金生山から産出する海綿化石は、下部層と花岡山の最上部層の風化面に多く見られ、それらは *Discosiphonella* 属、*Amdlysiphonella* 属、*Girtyocoelia* 属、*Girtyocoelia* 属に属するとしていますが、種の同定には至っていないということです。本書では海綿化石は風化面に多く見られると記されていますが、採掘が進んだ現在、下部層の石灰岩が露出している場所は殆どありません。また花岡山は既に採掘が完了(1992年)して整地されてしまいました。しかし、2009年から継続している金生山化石研究会の調査において、金生山北端の市橋地区には最上部層が広く分布していることが確認され、風化面には海綿化石が多く確認されました。また、中部層の石灰岩からも海綿化石が密集した岩塊が見つかり、その研磨標本は金生山化石館に展示してあります。

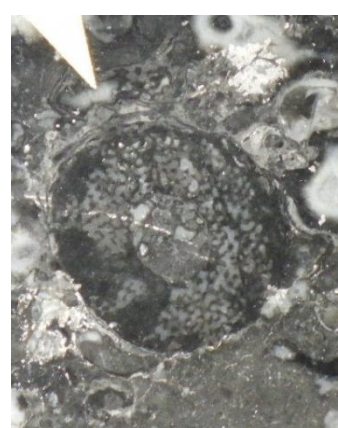
(文責：高木洋一)



Steinmannia ? sp.



Girtyocoelia ? sp.



Coelocladia ? sp.

お知らせ



わくわく体験を再開しました

化石が入った石灰岩をピカピカに磨いて、標本やアクセサリを作ったり、顕微鏡を見ながらフズリナ、貝形虫、巻貝、二枚貝、ウミユリの茎板、ウニのトゲなどの小さな化石を取り出したりする体験ができます。

作品は持ち帰ることができます。来館の記念にしてください。



問い合わせ： 大垣市金生山化石館 電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)
Email kasekikan@city.ogaki.lg.jp